清水華澄さんと〈第九〉女子会“歓喜の宴”

清水華澄×外園彩香×遠藤真理×岩佐雅美

左から外園、遠藤、清水、岩佐、小田島。練習所に近い新百合ヶ丘の魚民にて

日本の音楽界の年末の風物詩であるベートーヴェンの〈第九〉。今年の読響はイタリア人マエストロ、マッシモ・ザネッティを迎えて全6回の〈第九〉で一年を終える。読響の女性楽団員の皆さんと、声楽ソリストとして公演に参加するメゾ・ソプラノの清水華澄さんに、「オーケストラの中から見た〈第九〉」をたっぷり語っていただいた。　司会・構成／**小田島久恵**（音楽ライター）

演奏家としての〈第九〉あるある

――清水さんは熱心な読響ファンでいらっしゃいますね。

清水華澄（メゾ・ソプラノ）：私がオーケストラの演奏家を尊敬するのは、皆さん3、4歳のころから楽器と向き合って、一日何時間も練習して、何年も費やしてこられた方たちだから。私は音楽の勉強を始めたのが遅かったですし、さらに身体が楽器であるために、その日のコンディションに左右されてしまうことも多く、〈第九〉も周りを感じて音楽を奏でるところまで辿り着くのに時間がかかりました。でも、読響の皆さんはサラッとアンサンブルをやってのけていて本当にすごいですー！

遠藤真理（チェロ）：歌うのは4楽章だけですが、何楽章から舞台に立ちたいとかありますか？

清水：本当は最初から入りたいんですが、バリトンの方から「黙れ」と言われてしまいそう（笑）。私はマーラーの交響曲第2番〈復活〉でも第3番でも、オーケストラと一緒にやるときは全部舞台で聴いていたい。〈復活〉は長いから、途中で体が冷えてもぞもぞしちゃうかもしれないけど。実は、オーケストラの練習も見学したいんですよ。どのような流れでやっているのか理解できますし、指揮者の指示の出し方が細かく把握できたりもしますしね。

――〈第九〉はリハーサル日数が短いパターンも多いと聞きます。

遠藤：去年の指揮者のゲッツェルさんのときはそうでしたね。そういうときは、結構緊張します。〈第九〉は慣れているからといって柔軟になれる曲ではなく、基本的には怖いし、やりづらい曲だと思います。

岩佐雅美（ファゴット）：確かに、難しい曲ですよね。初めてのときのほうが、意外と怖いものなしで演奏できてしまう。でも、回数を重ねるごとに怖いところが分かってきますから……。

清水：やり込んで身体に入ってくるということはあるけれど、たくさん経験すると悪い思い出もくっついてきちゃう。

遠藤：あっ去年……とか、いろいろ思い出しちゃうよね（笑）。良かったことだけ思い出せばいいんですけど。

――〈第九〉は毎年演奏回数も多いですが、演奏家はどう感じているのでしょう？

岩佐雅美（ファゴット）

岩佐：できれば回数はあまり多くない方がいいです（笑）。やはりベートーヴェンの曲の中でも難しいですし。どの曲も大変ですが、その中でも〈第九〉はかなり大変。その年の公演が7回あるとしたら、楽器のリードは7回もつのかしらとか、やりくりも考えます。そりゃ少ない方が楽ですよ。

清水：毎回違う演奏になるから、その都度反省もすごくされるんでしょうね。読響のお客さんは熱心だから、毎回少しずつ変わるのを楽しみにして、何回も通う方もいそうですね。

外園彩香（ヴァイオリン）：私はあまり経験がないのですが、逆に「今まで何回〈第九〉に出たの？」と聴かれるのが面白くて。まだ数えられるほどしか出てないので、オーケストラの経験を積んでこの曲がどんなふうに自分の中で成長していくのかが楽しみです。

――素敵ですね！　〈第九〉とともに人生を歩んでいく……。読響の「変わった〈第九〉」で思い出したのですが、上岡敏之さんがものすごいテンポで1時間かけずに

清水華澄（メゾ・ソプラノ）

演奏されたときは、すごいなあと驚いたものです。

清水：2015年の〈第九〉はテンポが速い楽団が多かったですね。中でも上岡さんは天才的閃きというか、凡人には見えない景色を見ているというか……（笑）。聴かれたお客様は「楽しかった」と喜ばれていましたが。私はアンサンブルより「個」でいてほしいと言われ、〈ニーベルングの指環の〉ブリュンヒルデのように存在していてほしいとアドバイスをいただきました。あと、記憶に残っているのは16年のマルクス・シュテンツさん。ものすごく丁寧に声楽アンサンブルのリハーサルをやってくださって、嬉しかったです。あれくらい熱量を持ってソリスト稽古をしていただくと、マエストロのやりたいことが伝わってきて歌いやすいです。

好きなタイプは？

――なるほど。指揮者もいろいろですね。ところで唐突なのですが、皆さんにとってベートーヴェンは男性としてお好きなタイプですか？

遠藤：顔がいかつい印象。あんまり好みじゃない。

清水・岩佐・外園：（笑）

遠藤：コーヒーが好きで、豆をひとつずつ数えて飲んでいたとか……。それを聞いたとき、「めんどくさっ」と思いました。

外園：音楽と人間性を切り離して考えることが多いのですが、好きな作曲家はドヴォルザークとシューベルトなんです。あとシューマン。ベートーヴェンは、楽譜をよく読んで楽譜に書いてあることをきちんと音にするということを大切にしています。あとは室内楽的なことを考えて、周りにアンテナを張って弾こうかなと思っています。

清水・岩佐・遠藤：真面目〜。

――ドヴォルザークとシューベルトはなぜ好きなのですか？

外園彩香（ヴァイオリン）

外園：ドヴォルザークは温かくてほっとする音楽なんですね。日本人にとって耳なじみがいいし。〈ユモレスク〉も好きですし。シューベルトは交響曲の他にピアノ三重奏や弦楽三重奏にも凄く素敵な曲があるんです！　長いフレーズがあっちにいったり、こっちにいったり……しつこい曲ですが、しつこいのが好きなのかも。

遠藤真理（チェロ）

遠藤：しつこくした方がいいと思う男性が近づいてくるかもしれないから、あくまで音楽的に、ということだよね（笑）。

外園：音楽的には、ベートーヴェンの〈第九〉は第1楽章の冒頭が好きです。何調なんだろう？　これから何が始まるんだろう？　といろいろ期待させてくれる始まり方が素敵。

――遠藤さんは、音楽的にはベートーヴェンはいかがですか？

遠藤：結婚式のときに〈第九〉の第3楽章を使いましたね。

清水：えっ、なんでなんで？

岩佐：私も第3楽章は一番きれいだと思う。どのシーンで使ったの？

遠藤：一番最後のところ。お父さんに手紙を読むシーンね。

岩佐：確かに（笑）。それはお父さんも号泣したでしょうね。

やっぱり一年の締めくくりは〈第九〉で！

――やはり、それぞれに思い入れのある名曲なのですね。

岩佐：一度だけ出なかった年があったのですが、12月に〈第九〉をやらないと「年越し」の感じがしないんです。大変と言いつつ、弾かないで年を終えるのは変な感じがするんですね。

遠藤：大晦日のコバケンさんのベートーヴェン交響曲全曲演奏会を聴いた時は、心から〈第九〉に感動しました。端正な偶数番号、有名な奇数番号のシンフォニーを聴いた後の〈第九〉は、本当に最高でしたね。

外園：私はまだ初心者ですが、5年後にこの曲をどう弾いているのか楽しみです。今とは別の景色が見えてくるように勉強しようと思います。

清水：読響は、ポジティヴな人が多いのでサウンドにもそれが表れていますよね。何が好きで何が嫌なのか、演奏を聴いているとよくわかります。正直なオケ。だから楽しいし、聴いていて共感できるんです。

――12月の演奏会を楽しみにしています。

全員：ありがとうございます！

次期常任指揮者 ヴァイグレへの期待①

セバスティアン・ヴァイグレとフランクフルト歌劇場

中村真人

2018年10月14日アルテ・オーパーでのコンサートより（筆者提供）

2008年、音楽家人生の転機

今回読響からセバスティアン・ヴァイグレについての寄稿の依頼をいただいたとき、私はこれまでベルリンで聴いた彼のオペラや演奏会を振り返った。忘れがたいものはいくつもあるのだが、真っ先に浮かんだのは2008年6月に彼がベルリン・コンツェルトハウス管弦楽団に客演したときの演奏会である。

東ベルリン出身ということとも関係していると思われるが、ヴァイグレはドイツもののレパートリーに加えて、ロシア音楽にも強い。このときもムソルグスキー、ハチャトゥリアン、リムスキー＝コルサコフというオール・ロシアのプログラムで、スケールの大きな演奏を聴かせた。中でも忘れ難いのは、最後に演奏されたリムスキー＝コルサコフの〈シェエラザード〉。このとき、ヴァイオリン・ソロを受け持ったのが、当時コンツェルトハウス管の第1コンサートマスターのオーディションに合格したばかりの日下紗矢子だった。

試用期間が始まってまだ2か月弱という頃ではなかっただろうか。「彼女は疑いなく素晴らしいヴァイオリニスト。だが、コンサートマスターとしても優秀かどうかはまた別の問題」。オーケストラの関係者からこんな声も聞いていた。そんな中でオーケストラ・レパートリーの代表的なヴァイオリン・ソロを任される大舞台が訪れ、聴衆のみならず、オーケストラの全員が日下を注視した。

客席にいた私も緊張しながら聴き始めたのだが、結果的に日下は完璧ともいえる演奏を披露した。その成功の背景には、オペラ経験が豊富で、ソロを引き立たせる術を知り尽くしているヴァイグレの巧みなサポートがあったことも見逃せない。周知のとおり、日下は後に読響のコンサートマスターを兼任することになるが（現在は特別客演）、2016年にヴァイグレがR.シュトラウスの家庭交響曲で初めて読響の指揮台に立ったとき、コンサートマスターの席に座っていた日下は不思議な縁を感じずにはいられなかったという。

話が少し逸れてしまったが、あえて2008年の話から始めたのは、ヴァイグレにとっても、この年が彼の音楽家人生にとって大きな転機になったと思われるからである。

1997年から2002年までベルリン国立歌劇場の第1カペルマイスターを務めたヴァイグレは、2004年にはバルセロナのリセウ大劇場の音楽総監督に就任。そして、2008/09年シーズンにフランクフルト歌劇場の音楽総監督のポストを得る。これが故国ドイツにおける最初の大きなポストだった。以来10年、フランクフルトとの関係は現在においても続いているのみならず、2015年、18年と『オーパンヴェルト』誌による「年間最優秀オペラ劇場」を受賞するなど、快進撃を続けるフランクフルト歌劇場の立役者となっている。

巧みなバランス感覚と豊かな音楽性

そんなヴァイグレの現在を知りたい思いで、10月14日、私はフランクフルトに飛んだ。この日アルテ・オーパーで行われた、歌劇場の座付オーケストラであるムゼウム管弦楽団の定期演奏会を聴くためである。曲目はモーツァルトのピアノ協奏曲第24番とブルックナーの交響曲第8番というずっしりくる組み合わせ。

メインのブルックナーの「第8」は、意外にも1887年の第1稿による演奏。悠然と落ち着いた導入から、ブルックナーが最初に思い描いた音が実に新鮮に鳴り響く。ヴァイグレを生で聴くのは久々だったが、ベルリンでのカペルマイスター時代に比べて、重心が低く、それでいて明快で見通しのよい音

楽をやるようになっていた。和音がきれいなバランスで美しく響き渡ること。それはヴァイグレの確かな耳を物語るものだ。第1楽章の最後、第2稿では消え入るように終わるのに対し、初稿版では輝かしいコーダで幕を閉じるが、この部分での死者が突如蘇るかの如きデモーニッシュな迫力には震撼させられた。

アルテ・オーパーの外観（筆者提供）

なんといっても素晴らしかったのは第3楽章のアダージョだ。冒頭のざわめきから別世界に連れて行かれ、シンプルな刻みは大宇宙のまどろみへと昇華する。チェロの旋律での青白い炎、そしてホルンやフルートのコラールでの深い呼吸。フィナーレに入ると、積み上げていくような縦の構築性に、息の長いフレーズで横へと流れていく歌謡性とが見事に調和する。それでいて、表面的な受けを狙ったようなところは微塵も感じられない。ピアノのキット・アームストロングと細やかで味の濃い対話が交わされた前半のモーツァルトと合わせ、ハ短調のカップリングによるコンサートに私は深い充足感を覚えた。

終演後、楽屋口付近で、思いがけずヴァイグレ本人と少し言葉を交わすことができた。ブルックナーの「第8」を今回初稿版で上演した理由について聞いてみたところ、「ブルックナーが最初に頭に思い描いた音楽を、どう加工し、つなぎ合わせ、今日一般的に聴く版にまとめ上げたのか。その過程を提示することは、聴衆にとってもオーケストラにとっても貴重な経験になると思ったからです。もちろん私自身にとってもね」と屈託のない笑顔で語ってくれた。そして、「読響との共同作業をいまから楽しみにしています」とも。

飽くなき探究心、そして読響との挑戦

めったに上演されないブルックナーの第8交響曲の初稿版をさりげなく取り上げるところに（劇場のHPには記載されていなかったので、プログラムをめくって、あるいは演奏が始まってびっくりした聴衆も多かったはずだ）、ヴァイグレという人の好奇心とある種の遊び心を見る。つまり、ドイツ・ロマン派の音楽をもっとも得意としつつも、そこに安住しない。あるいは常に新しいアクセントと実験的要素を加えようとする。

その姿勢はフランクフルト歌劇場のプログラムにも表れている。例えば、今シーズンの新演出演目でヴァイグレが指揮するのは、ストラヴィンスキーの〈エディプス王〉とチャイコフスキーの〈イオランタ〉を一晩で上演する公演、そしてシュレーカーの〈はるかなる響き〉（1912年にフランクフルトで初演）。今回のブルックナーのコンサートの前夜には、ドヴォルザークの〈ルサルカ〉を指揮している。この10年で、ワーグナーやR.シュトラウスの主要オペラのほとんどを上演したという。一方では、ヴェルディやプッチーニも振り、アリベルト・ライマンの〈リア〉、プロコフィエフの〈賭博者〉、グリンカの〈イワン・スサーニン〉などコアなレパートリーにまで及ぶ。

ヴァイグレがフランクフルトで目覚ましい音楽的成果を生み出してきたのは、この劇場の環境によるところも大きい。2007年からこの劇場で第2ヴァイオリンを弾く山口伸子は、一つの例としてこう説明する。

「1990年代初頭まで、この劇場では、毎日のように違う演目を上演していたそうです。しかし現在の劇場では、1週間に3演目以上を上演できないようになっているほか、再演初日の前には必ず通し練習を行うようなルールがあるので、毎回ある程度のクオリティを保つことができていると言われています。実は、このシステム作りに大きく寄与したのは、93年から97年までこの劇場の音楽監督だったシルヴァン・カンブルランなんです」

ここにもまた、読響との目に見えない接点があるのだった。さまざまなつながりをたどっていくと、読響は一貫したコンセプトのもと、実にいいシェフを選んできたものだと改めて思う。

フランクフルト歌劇場に革新をもたらしてきたインテンダント（総裁）のベルント・レーベは、「彼はこの劇場にとって理想的な音楽総監督です。指揮するという役割を演じることなく音楽を導く。権威主義の形を取らずに自然と威光を放っている」と、ヴァイグレを評す。

フランクフルト歌劇場との豊穣な10年間を過ごしてきたセバスティアン・ヴァイグレは、彼の音楽の旅の伴奏者に、まもなく読響という新たなパートナーを加える。シンフォニーの分野がメインだが、フランクフルトとの共同制作によるオペラも考えているというから期待は膨らむ。数年後、ヴァイグレと読響はどのような地平に立っているだろう。（文中敬称略）

（なかむらまさと・ジャーナリスト／在ベルリン）

心に残るクラシック

ヤマザキマリ——④〈最終回〉

Mari Yamazaki

喧嘩の日々のBGM

モーツァルト：ファゴット協奏曲 変ロ長調 K.191

©川上尚見

モーツァルトの〈ファゴット協奏曲〉を25年ぶりくらいに聴いた。海外のドキュメンタリー動画を仕事中に眺めていたら、不意にBGMに使われているこの曲が流れてきたのだが、久々に聴いてみると、こんなに楽観的な曲調だったっけ、と意外な気持ちになった。

17歳でフィレンツェの美術学校に通い始めた頃、その当時シェアしていた家の同居人だった大学生のジュゼッペは、フィレンツェ大学の文学部の学生だった。幼い頃は外での買い物にお金を払うことすら知らなかったというお坊ちゃま育ちだが、私が出会った頃の服装といえば、毛玉のついたセーターに女性にもらったらしき手編みのマフラーを巻いて、片手には必ず詩集を持っていた。

この、まるで絵に書いたような“詩人”の佇(たたずま)いは、ヨーロッパにやってきたばかりの、そしてジャン・コクトーやアポリネールのような詩人の作品に傾倒していた私にとっては、欧州文化の表象そのものだった。そして、ジュゼッペは詩人だけではなく音楽院でファゴットを学ぶ音楽家志望者でもあった。若かった私はすぐに恋に落ち、一緒に暮らすようになった。

しかし、ジュゼッペの裕福な実家はその後経済的に破綻し、悠長に詩や音楽を学べるような状況ではなかった。一応様々な仕事を試してはみるが、どれも3日と続かない。仕方がないので、代わりに私が働くしかなかった。画学校に通いながら、空いている時間を全てアルバイトで埋めた。当時、日本はバブルの真っ只中で、日本からの観光客が止めどもなくフィレンツェの街を訪れていたおかげで、あれこれ日本語を生かす類いの仕事にはありつけた。しかし、それでも画家志望と詩人・音楽家志望の二人の生活は、苦しかった。どの家に暮らしてもガス・水道・電気といったインフラは断たれ、親戚や友人にも借金を頼まないと食べるものすらない、という日が当たり前のようにあった。

私は仕事と学業で疲れ果てていたが、ジュゼッペはあまり困ったような様子でもなく、家に帰るとファゴットを吹いている。デュカスの〈魔法使いの弟子〉のユーモラスなファゴット・ソロパートが貧困と疲労と学業の両立で摩耗していた私の神経を逆なですることもあった。「私ばっかりこんな目に遭わせて！　あんたは自分の好きな事ばっかりして！」と声を上げる時は、さながらイソップ物語のキリギリスを目のあたりにしているような心地だった。ジュゼッペはそれでもファゴットの素晴らしさを説き、いつか大きなステージで、大好きなモーツァルトの〈ファゴット協奏曲〉を奏でたいと語っていた。そして、お金が貯まったらドイツのファゴット製造会社“ヘッケル”の楽器を持ちたい。私はそんな夢を語るジュゼッペの脇で未来への危機感に迫られるのだった。

私達はいつも喧嘩(けんか)をしていた。だいたい喧嘩をしているときのBGMが〈ファゴット協奏曲〉だった。付き合い始めて11年目、私はジュゼッペの子供を身ごもった。11年も付き合っていながら結婚をしなかったのは、彼のお母さんが途中で亡くなってしまって同棲をあれこれ煩(うるさ)く言う人がいなくなったせいでもあったが、私は未婚で子供を産むことに抵抗はなかった。なんとかなるだろう、そう思って、ジュゼッペがどこかで遊びほっつき歩いている間にひとりで病院へ行き、ひとりで出産し、ジュゼッペと別れる決断をした。これからは自分で自分を養って行く術(すべ)を持ってほしいと思ったからだった。

フィレンツェの街並み

ジュゼッペはその後、別の女性と結婚をしたらしいが、詳しい事はわからない。ただ、私は自分の子供との新しい人生を開拓するために、フィレンツェのジュゼッペとの過去を顧みることはなくなった。

しかし、思いがけず久々に耳に入ってきた〈ファゴット協奏曲〉でちょっとわかったことがあった。ジュゼッペは貧しかったが、基本的に私よりも何倍も楽観的な人だったのだ。辛い時も苦しい時も日々彼はこの曲に救われていたのだろう。私はハワイに暮らす息子に、「あなたのお父さんが毎日聴いてた曲。聴くと喧嘩の日々を思い出しますが、今聴いてみると、なにやら楽しくなる音楽でした」と書き添えてこの曲の動画を送った。

◆次号からは竹森俊平さんです。

◎コンサートマスター

伝田正秀

Masahide Denda

音楽が自然と豊かになる そんなコンサートマスターでありたい

≪今年４月、アシスタント・コンサートマスターからコンサートマスターに就任し、１０月の公演では初めてトップに座りました。いかがでしたか≫

26歳の時から仙台フィルハーモニー管弦楽団のコンマスを6年間務めましたが、読響でこのようなやりがいのある機会をいただき、本当にありがたいです。改めて楽しさを感じました。

より多くの経験を求めて東京で活動を始めていた頃、2014年に読響からアシスタント・コンマスの話をいただきました。このポジションとしては、自分が音楽的に何かを主張して弾くよりも、それぞれのコンマスが感じている細かなニュアンスや音楽性に寄り添い、大きく拡張するような弾き方が大切と考え、意識してやってきました。小森谷さん、長原さん、日下さんと、現在の読響のコンマス陣は三者三様に素晴らしく、演奏中の発見や刺激も多く、一緒に演奏できることが嬉しいです。

コンマスには親分肌な人、頭脳的で研究熱心な人、非凡な空気感がある人など、様々なタイプがいると思います。一緒に弾いているメンバーそれぞれが持っている豊かな音楽性、感性が活き活きとなり、音楽が自然と膨らむような雰囲気を持っていることが大切だと思います。

≪１２月は何と言っても〈第九〉で、今年は６公演あります。魅力はどんなところですか≫

日本では年末の恒例行事のようになっていますね。「すべての人に喜びを」と、大きなスケールで歌う〈第九〉を年末に聴くことで、人生の喜びや活力、未来への希望などを皆さん感じるのではないでしょうか。

今までに何度も聴いていらっしゃるお客さんも多いかと思いますが、読響の〈第九〉で、皆さんの想像を超えるニュアンスや、大きな表現を期待していただけたらと思います。

≪今年は、台風や地震、酷暑など自然災害が多く、中止や延期されたコンサートもあったと聞いています。仙台フィルに所属していた時には、東日本大震災が起きていますね≫

発生した時はたまたま東京にいましたが、それから3か月間、演奏活動はすべてストップしました。震災後初めて開いたコンサートのことは、今でも忘れられません。ライフラインも復旧できていない地域がある中で、演奏などしていいものか迷いましたし、反対意見もありました。しかし、自分たちにできる事は音楽しかないと、お寺で百人ほどの観客の前で演奏したのですが、すごく喜んでいただき、音楽の人の心に働きかける大きな力を改めて感じました。これを機にアンサンブルであちこち回る中で、聴いてくださるお客さんの感覚をより意識するようになりました。今もお客さんの心に作用する選曲や音楽創りを優先して考えます。

≪今後の目標と、休みの過ごし方を教えてください≫

オーケストラの演奏のみならず、室内楽や名曲小品サロン・コンサートでもより面白い内容を考え、演奏していきたいです。また、教える事も好きなので続けていけたらと思っています。

東京・池袋の東京芸術劇場で行っている「ジュニア・アンサンブル・アカデミー」には、携わって5年になりました。小学生から高校生まで20～30人の参加者がいますが、びっくりするような素晴らしい技術を持った学生も多いですよ。早いうちにアンサンブルの経験をすると同時に、音の響かせ方や素敵なニュアンスなどを意識することを楽しんでもらいたいです。

練習はもちろんですが、たくさんの音楽を聴くことも大切ですし、特に昔の巨匠の演奏は音と歌い方にそれぞれ個性が強く、深い演奏が多いので、おすすめです。

ここ7年間、「デグー」という動物を飼っています。知能が高く、コミュニケーションを取れることから「歌うネズミ」と言われているんですよ。教えれば杖を持つことも出来るほどで、いつもいやしてくれる大切な家族の一員です。

Upcoming concert schedule

首席客演指揮者・山田の〈オルガン付き〉&〈ローマの祭〉

1/8（火）19:00 第618回 名曲シリーズ サントリーホール

山田和樹

サン=サーンス：交響曲 第3番〈オルガン付き〉
ラロ：チェロ協奏曲
レスピーギ：交響詩〈ローマの祭〉

指揮：山田和樹（首席客演指揮者）　**チェロ：ニコラ・アルトシュテット**

山田が千夜一夜物語を振り、スペインの国宝級の巨匠が共演！

1/12（土）14:00 第213回 土曜マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール

1/13（日）14:00 第213回 日曜マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール

ホアキン・アチュカロ

ラヴェル：高雅で感傷的なワルツ
ラヴェル：ピアノ協奏曲
リムスキー=コルサコフ：交響組曲〈シェエラザード〉

指揮：山田和樹（首席客演指揮者）　**ピアノ：ホアキン・アチュカロ**

ワーグナーから藤倉作品まで、山田が描く神秘的な音世界

1/18（金）19:00 第584回 定期演奏会 サントリーホール

小菅 優

諸井三郎：交響的断章
藤倉 大：ピアノ協奏曲 第3番〈インパルス〉（共同委嘱作品／日本初演）
ワーグナー：舞台神聖祭典劇〈パルジファル〉から第1幕への前奏曲
スクリャービン：交響曲 第4番〈法悦の詩〉

指揮：山田和樹（首席客演指揮者）　**ピアノ：小菅 優**

ウィーンの俊英ゲッツェルとジャズ界の鬼才・小曽根が初共演

1/31（木）19:00 第22回 大阪定期演奏会 フェスティバルホール（大阪）

サッシャ・ゲッツェル

ワーグナー：楽劇〈ニュルンベルクのマイスタージンガー〉第1幕への前奏曲
モーツァルト：ピアノ協奏曲 第23番
ブラームス：交響曲 第1番

指揮：サッシャ・ゲッツェル　**ピアノ：小曽根 真**

1月 公演の聴きどころ

1月の演奏会には、2018年4月に読響首席客演指揮者に就任した**山田和樹**が登場する。山田は現在、名門モンテカルロ・フィルの芸術監督兼音楽監督を務めるなど、欧州で着実にキャリアを積んでいる。8日の《名曲》は、冒頭にサン=サーンスの〈オルガン付き〉を置き、ラロのチェロ協奏曲を挟んでレスピーギの〈ローマの祭〉と、壮大でオーケストラが輝かしく響きわたる曲を前後に配したプログラム。協奏曲では、欧州で注目を浴びる気鋭チェリストの**アルトシュテット**が、スペインの民俗的な色彩感を引き出す。

12日・13日の《マチネー》は、『千夜一夜物語』の世界を描いたリムスキー=コルサコフの代表作〈シェエラザード〉を演奏する。異国情緒あふれる美しい旋律やコンサートマスターの独奏による艶やかな音色と超絶技巧に注目だ。前半のラヴェルのピアノ協奏曲では、86歳のスペインの長老**アチュカロ**が2016年9月以来の共演。ジャズやスペイン音楽の要素もちりばめられた傑作で、円熟味あふれる名人芸を披露する。お聴き逃しなく。

18日の《定期演奏会》は、演奏機会が少ない諸井三郎の作品に続き、現代の人気作曲家・藤倉大にモンテカルロ・フィルとスイス・ロマンド管と共同委嘱したピアノ協奏曲第3番〈インパルス〉を日本初演する。独奏は国内外で活躍する**小菅優**が務める。後半は、ワーグナーとスクリャービンという組み合わせ。〈法悦の詩〉では、山田のタクトが誘う身震いするほど美しく官能的な世界に酔いしれたい。

31日の《大阪定期》は、ウィーンの俊英**ゲッツェル**がワーグナーやブラームスを振るドイツ・プログラム。モーツァルトのピアノ協奏曲では、クラシックとジャズの双方で活躍し、ニューヨーク・フィルなどと共演するカリスマ**・小曽根真**が、ファンタジーに満ちたソロを奏で舞台を“オゾネ・ワールド”に染める。

（文責：事務局）

1回券料金表

定期・名曲・みなとみらい	S ¥7,500	A ¥6,500	B ¥5,500	C ¥4,000
マチネー	S ¥7,500	A ¥5,500	B ¥4,500	C ¥4,000
大阪定期	BOX ¥8,500	S ¥6,100	A ¥5,100	B ¥4,100

小森谷が読響メンバーと繰り広げる白熱のアンサンブル

2/5（火）19:30　第21回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール ※19:00 解説　完売

小森谷巧

《小森谷巧リーダーによる室内楽》

モーツァルト：オーボエ四重奏曲　シューベルト：八重奏曲

ヴァイオリン：**小森谷 巧、太田博子**　ヴィオラ：**柳瀬省太**
チェロ：**遠藤真理**　コントラバス：**大槻 健**　オーボエ：**辻 功**
クラリネット：**金子 平**　ファゴット：**岩佐雅美**　ホルン：**日橋辰朗**

小林が〈運命〉を振り、英国の新鋭ワリー＝コーエンが共演

2/9（土）14:00　第214回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

2/10（日）14:00　第214回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

小林研一郎

ウェーバー：歌劇〈オベロン〉序曲
チャイコフスキー：ヴァイオリン協奏曲
ベートーヴェン：交響曲 第5番〈運命〉

指揮：**小林研一郎**（特別客演指揮者）
ヴァイオリン：**タムシン・ワリー＝コーエン**

タムシン・
ワリー＝コーエン

二人のカリスマが競演！　炎のマエストロ×天才ピアニスト

2/14（木）19:00　第619回 名曲シリーズ
サントリーホール

2/16（土）14:00　第109回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

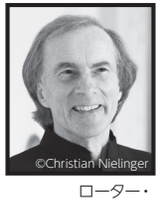
牛田智大

チャイコフスキー：ピアノ協奏曲 第1番　ブラームス：交響曲 第2番

指揮：**小林研一郎**（特別客演指揮者）　ピアノ：**牛田智大**

ドイツの巨匠が1公演のために来日。ブルックナーの神髄に迫る

2/22（金）19:00　第585回 定期演奏会
サントリーホール



ローター・
ツァグロゼク

リーム：Ins Offene...（第2稿）　ブルックナー：交響曲 第7番

指揮：**ローター・ツァグロゼク**

お申し込み・お問い合わせ
読響チケットセンター
（10:00〜18:00／年中無休）　0570-00-4390（ヨミキョー）
ホームページ・アドレス　https://yomikyo.or.jp/

“色彩の魔術師”カンブルランの極上のフランス音楽

3/7（木）19:00　第620回 名曲シリーズ
サントリーホール

3/9（土）14:00　第110回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

サラ・ルヴィオン

イベール：寄港地、フルート協奏曲
ドビュッシー（ツェンダー編）：前奏曲集、ドビュッシー：交響詩〈海〉

指揮：**シルヴァン・カンブルラン**（常任指揮者）
フルート：**サラ・ルヴィオン**

豪華歌手陣の共演で贈るシェーンベルクの巨大作

3/14（木）19:00　第586回 定期演奏会
サントリーホール　完売

レイチェル・ニコルズ

シェーンベルク：グレの歌

指揮：**シルヴァン・カンブルラン**（常任指揮者）
ソプラノ：**レイチェル・ニコルズ**
メゾ・ソプラノ：**クラウディア・マーンケ**
テノール：**ロバート・ディーン・スミス、ユルゲン・ザッヒャー**
バリトン・語り：**ディートリヒ・ヘンシェル**
合唱：**新国立劇場合唱団**（合唱指揮：**三澤 洋史**）

※当初発表したものから出演者が一部変更されました。

鮮烈なサウンド！　小編成で披露する20世紀音楽選

3/19（火）19:00　読響アンサンブル・シリーズ 特別演奏会
紀尾井ホール

ピエール＝ロラン・
エマール

《カンブルラン指揮〈果てなき音楽の旅〉》

ヴァレーズ：オクタンドル　メシアン：7つの俳諧
シェルシ：4つの小品　グリゼー：〈音響空間〉から“パルシエル”

指揮：**シルヴァン・カンブルラン**（常任指揮者）
ピアノ：**ピエール＝ロラン・エマール**

任期ラスト公演。カンブルラン、9年間ありがとう！

3/23（土）14:00　第215回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

3/24（日）14:00　第215回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

シルヴァン・
カンブルラン

ベルリオーズ：歌劇〈ベアトリスとベネディクト〉序曲
ベートーヴェン：ピアノ協奏曲 第3番　ベルリオーズ：幻想交響曲

指揮：**シルヴァン・カンブルラン**（常任指揮者）
ピアノ：**ピエール＝ロラン・エマール**

■小林研一郎 × 小山実稚恵 × 読売日本交響楽団

12/8（土）14:00　かつしかシンフォニーヒルズ

■台湾公演

12/11（火）19:30　台中国家歌劇院
12/12（水）19:30　台北国家音楽庁

指揮：小林研一郎（特別客演指揮者）
ピアノ：小山実稚恵（12/8、12）
ヴァイオリン：リチャード・リン（12/11）

ラフマニノフ：ピアノ協奏曲 第2番（12/8、12）
チャイコフスキー：ヴァイオリン協奏曲（12/11）
チャイコフスキー：交響曲 第5番 ほか

●かつしか［料金］SS ¥5,800　S ¥5,000　A ¥3,500　B ¥2,500　Z ¥2,000
［お問い合わせ］かつしかシンフォニーヒルズ
03-5670-2233（10～19時／休館日を除く）

●台湾公演の詳細
国際ペース文教基金会　+886 2 8786 3777（日本語対応可）

東京芸術劇場シアターオペラ vol.12　全国共同制作プロジェクト

■1/26（土）14:00、1/27（日）14:00　東京芸術劇場コンサートホール

総監督・指揮：井上道義
演出・振付：森山開次
出演：ヴィタリ・ユシュマノフ、三戸大久、髙橋絵理、
デニス・ビシュニャ、鷲尾麻衣、金山京介、
小林沙羅（1/26）、藤井玲南（1/27）、近藤 圭
合唱：東響コーラス

モーツァルト：歌劇〈ドン・ジョヴァンニ〉 全幕
（新演出、英語字幕付、日本語上演）

［料金］SS ¥12,000　S ¥10,000　A ¥8,000　B ¥6,000　C ¥4,000
D ¥3,000　E ¥1,500
［お問い合わせ］東京芸術劇場ボックスオフィス
0570-010-296（10～19時／休館日を除く）

Highlights of 2019–20 season

第10代常任指揮者セバスティアン・ヴァイグレとともに新時代を迎える読響。2019–20シーズンのラインナップからは、さっそく新しいカラーが伝わってくる。ヴァイグレと客演指揮者たち、そして名だたるソリストたちが、次代の扉を開く。刺激的なシーズンに胸が躍る。　〈飯尾洋一（いいお よういち）・音楽ライター〉

定期演奏会

セバスティアン・ヴァイグレ　©読響

常任指揮者**セバスティアン・ヴァイグレ**を中心に、充実の指揮者陣が登場する定期演奏会。有名曲のみならず、新作や珍しい作品も多数含む意欲的なラインナップが組まれた。

オラリー・エルツ　©Marco Borggreve

ヴィルデ・フラング　©Marco Borggreve

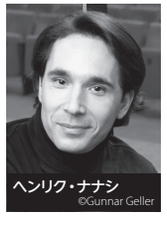
まず4月はエストニアの俊英、**オラリー・エルツ**が、母国の作曲家**トゥール**の共同委嘱作品（アジア初演）、**武満徹**の〈星・島（スター・アイル）〉、**シベリウスの交響曲第5番**他を指揮する。新世代のスター、**ヴィルデ・フラング**の独奏による**ストラヴィンスキーのヴァイオリン協奏曲**も楽しみ。

5月はいよいよ**ヴァイグレ**が登場する。プログラムは**ヘンツェ**の〈**7つのボレロ**〉と**ブルックナーの交響曲第9番**。ヘンツェ作品は2000年、スペインのカナリア諸島音楽祭で読響が初演した楽団ゆかりの曲。ブルックナーは新コンビの行方を占う試金石となりそう。

山田和樹　©読響

6月、首席客演指揮者の**山田和樹**は驚きのプログラムを披露する。**伊福部昭**の**SF交響ファンタジー第1番**といえば、『ゴジラ』をはじめとする東宝特撮映画の名曲から編まれた組曲。特撮ファンは感涙必至。さらに**アルビナ・シャギムラトヴァ**の独唱による**グリエールのコロラトゥーラ・ソプラノのための協奏曲**、**カリンニコフの交響曲第1番**という、ロシアの大地を思わせる雄大な2曲が並ぶ。

アルビナ・シャギムラトヴァ　©Pavel Vaan Leonid Semenyuk


ヘンリク・ナナシ　©Gunnar Geller

7月はハンガリーの気鋭、**ヘンリク・ナナシ**が指揮台に立つ。**バルトーク**の〈**管弦楽の**

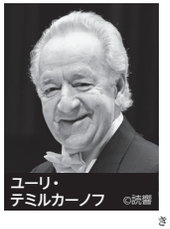
ための協奏曲〉と**コダーイ**の〈**ガランタ舞曲**〉では、「お国もの」ならではの強みを発揮してくれるはず。**サン＝サーンス**の**ピアノ協奏曲第5番**〈**エジプト風**〉のソロは、2015年のチャイコフスキー・コンクールで最大の話題を呼んだ注目株**リュカ・ドゥバルグ**。

リュカ・ドゥバルグ ©Felix Broede-SONY Music Entertainment

9月は**ヴァイグレ**がふたたび登場、マーラーに影響を与えながらも25歳で世を去った悲運の作曲家**ハンス・ロット**の**交響曲**に光を当てる。**アルバン・ゲルハルト**が独奏する**プフィッツナー**の**チェロ協奏曲**（**遺作**）を聴けるのも貴重。

アルバン・ゲルハルト ©Kaupo Kikkas

10月は巨匠**ユーリ・テミルカーノフ**が**ショスタコーヴィチ**の**交響曲第13番**〈**バビ・ヤール**〉を披露。マエストロならではの強靭（きょうじん）なサウンドを体験できそうだ。男声合唱を**新国立劇場合唱団**が歌うのも心強い。

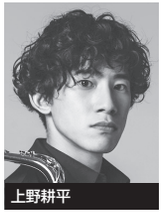

ユーリ・テミルカーノフ ©読響

11月はチェコの逸材**トマーシュ・ネトピル**が**スーク**の**アスラエル交響曲**を取りあげる。同時期に世を去った作曲者の義父であり師のドヴォルザークと、その娘である妻のふたりを悼む渾（こん）身の大作である。**ジャン＝ギアン・ケラス**はリゲティのチェロ協奏曲で精緻な音のテクスチャーを紡ぎ出す。

トマーシュ・ネトピル ©Elisa Haberer

選曲の妙で**下野竜也**の右に出る人はいない。2020年1月は現代の作曲家を中心とした斬新なプログラム。**グバイドゥーリナ**の〈**ペスト流行時の酒宴**〉（日本初演）は曲名からしてインパクト抜群。躍進する若手奏者、**上野耕平**は**アダムズ**の**サクソフォン協奏曲**に挑む。

下野竜也 ©読響


上野耕平

2月はもうひとりの首席客演指揮者**コルネリウス・マイスター**が、**ブルックナー**の**交響曲第2番**を指揮する。ドイツの若手が描くブルックナー像はいかに。名手**クリスティアン・テツラフ**の独奏による**ベルク**の**ヴァイオリン協奏曲**も大きな聴きものとなる。

コルネリウス・マイスター ©Marco Borggreve

クリスティアン・テツラフ ©Giorgia Bertazzi

シーズンの掉尾（ちょうび）を飾るのは3月の**ヴァイグレ**。**ヒンデミット**の〈**4つの気質**〉は**ルーカス・ゲニューシャス**のピアノ独奏を伴うユニークな作品。R. シュトラウスの交響詩〈英雄の生涯〉では、壮麗な音のスペクタクルがくりひろげられることだろう。

名曲シリーズ

名曲シリーズでは、大作曲家たちが残した不滅の傑作がプログラムの中心となる。多彩な顔ぶれの指揮者たちに豪華ソリスト陣が花を添える。

鈴木優人 ©Marco Borggreve

4月は先頃バッハ・コレギウム・ジャパン首席指揮者に就任した**鈴木優人**が客演する。愉悦に満ちた**ラモー**の〈**優雅なインドの国々**〉**組曲**、躍動感あふれる**ストラヴィンスキー**の〈**ペトルーシュカ**〉（1947年版）で、バロック音楽と20世紀音楽を対比させる。**ショパン**の**ピアノ協奏曲第2番**ではフランスの若手**レミ・ジュニエ**がソロを担う。

レミ・ジュニエ ©Jean-Baptiste Millot

5月は常任指揮者**ヴァイグレ**のドイツ音楽プログラム。父クレメンスゆずりの才能を開花させる**ユリア・ハーゲン**が、**シューマン**の**チェロ協奏曲**を演奏する。**ベートーヴェン**の**交響曲第3番**〈**英雄**〉では、ヴァイグレの目指す音楽が明確に伝わるのではないだろうか。

セバスティアン・ヴァイグレ

ユリア・ハーゲン ©NedaNavaee

6月は特別客演指揮者の**小林研一郎**が、**フランク**の**交響曲**を指揮する。鬱（うつ）屈した情念が渦巻くこの曲を完全燃焼させられるのは「炎のマエストロ」だけ。**ブルッフ**の**ヴァイオリン協奏曲第1番**を奏でる**キム・ボムソリ**は輝かしいコンクール歴を誇る名花。

小林研一郎 ©読響

キム・ボムソリ ©Jaeyoung Heo

7月はイギリスの**ブラムウェル・トーヴェイ**が客演する。長年バンクーバー交響楽団の音楽監督を務めたベテランだ。YouTubeでライトセーバーを振って「スター・ウォーズ」を指揮する映像が話題を呼んだ。今回は**ホルスト**の**組曲**〈**惑星**〉で宇宙へと誘う。**ラフマニノフ**の**ピアノ協奏曲第2番**では異才**リュカ・ドゥバルグ**がソロを弾く。

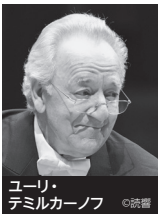
ブラムウェル・トーヴェイ ©DavidCooper

リュカ・ドゥバルグ ©Bernard Bonnefon

9月はふたたび**ヴァイグレ**が登場し、**マーラー**の**交響曲第5番**を指揮する。オーケストラの機能性を最大限に生かした鮮烈な演奏を期待したい。**ベートーヴェン**の**ピアノ協奏曲第4番**の独奏は、ウィーンの重鎮**ルドルフ・ブ**

ルドルフ・ブッフビンダー ©Marco Borggreve

ッフビンダー。巨匠の至芸を堪能できる。


ユーリ・テミルカーノフ ©読響

10月は名誉指揮者**ユーリ・テミルカーノフ**が招かれる。**チャイコフスキーの交響曲第5番**でロシア音楽の神髄が読響に伝授されることだろう。**シベリウスのヴァイオリン協奏曲**で独奏を務める**エマニュエル・チェクナヴォリアン**は、1995年ウィーン生まれの新鋭。父ロリスは読響に客演歴があり「爆演」で知られる名指揮者だが、その血は受け継がれているのだろうか。

エマニュエル・チェクナヴォリアン ©UWE ARENS

アイヴァー・ボルトン ©Ben Wright Photography

12月は年末恒例のベートーヴェン〈第九〉。指揮はザルツブルク・モーツァルテウム管弦楽団の名誉指揮者で、バロック・オペラの分野でも名高い**アイヴァー・ボルトン**。**サリー・マシューズ、池田香織、小堀勇介、トーマス・オリーマンス**の独唱陣と**新国立劇場合唱団**が共演する。

2020年1月に客演するドイツの**エリアス・グランディ**は、ハイデルベルク歌劇場の音楽総監督を務め、将来を嘱望される俊才。**前橋汀子**のヴァイオリンとともに、**サラサーテ**の〈**ツィゴイネルワイゼン**〉や**マスネ**の〈**タイスの瞑想曲**〉などの名曲を演奏する。**ラヴェル**の〈**ボレロ**〉では読響の名手たちによる妙技が聴きどころ。

エリアス・グランディ ©Felix Broede

前橋汀子 ©篠山紀信

2月は首席客演指揮者の**山田和樹**と鬼才**イーヴォ・ポゴレリッチ**の共演が実現する。曲は**シューマンのピアノ協奏曲**。しばしば想像を絶するテンポ設定でわが道を行くポゴレリッチだが、一方で近年はノーマルなテンポを採用することも。「事件」か、「語り草の名演」か。ポゴレリッチの行くところ、なにかが起きる。**ドヴォルザークの交響曲第7番**は、作曲者が確信を持って世に問うた自信作。

山田和樹 ©読響

イーヴォ・ポゴレリッチ ©Alfonso Batalla

シーズン最後の3月を締めくくるのは**ヴァイグレ**。**ブラームスの交響曲第1番**を中心にドラマティックな曲目が並ぶ。ドイツと日本にルーツを持つ**アラベラ・美歩・シュタインバッハー**は、**シューマンのヴァイオリン協奏曲**で、確かな技巧に裏打ちされた本格派の演奏を披露してくれるはずだ。

アラベラ・美歩・シュタインバッハー ©Peter Rigaud